

\* これは実際の試験問題ではありません。  
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号				
------	--	--	--	--

学習能力考査

人 文 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. 絶対に開けるなど言つつ、PDF ではすでに開いていたります。
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 28 の問い(1-28)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があつてから正味 70 分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 70 分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書きいれないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

## 人格の尊厳と尊敬の感情

## I

「芸術家にとっては官能を伴わない精神は希求するに値しない、と同様に、精神のない官能もいただきかねるものです。(中略)芸術家は、もはや神の恩寵を享ける容器ではなくなりました。感動に対する畏敬の念は消滅してしまいました。」今世紀最高の指揮者と言われているフルトヴェングラーの言葉である。

1954年フルトヴェングラー死亡のニュースを聞いて、暗澹たる<sup>あんたん</sup>気持ちを抱き、結核の療養所で追悼のレコードコンサートを開いた人に、この指揮者を敬愛してやまない思想家の丸山真男氏がいる。氏はある鼎談<sup>ていだん</sup>の中でつぎのようなことを語っている。「あの畏敬っていうのはゲーテがよく言う言葉であると同時にフルトヴェングラーがもっとも共感する感情じゃないでしょうか。作品に対する畏敬の感情ね。畏敬とか高貴さとかいう感情は世界的に欠乏しているし、現在の日本なんか一番ないと思うんですけど…。ちょうど音楽家ではベートーヴェンであったように、文学者ではゲーテじゃないでしょうかね。」こうした指摘を待つまでもなく、今日我々が畏敬とか高貴という言葉とその語感にぴったりするような仕方で使える場面はたしかにまれである。

おそらく、人格という言葉にしても、事情は同じではあるまいか。現代の代表的な映画監督と言われるタルコフスキーは「人類は自らを信じることをやめてしまったかのようには私には見える。今日の間を考えると見えてくるのは、コーラスの中で口をパクパクさせている歌い手の姿である。歌を歌うリズムに合わせてはいるが、何の音程も創り出していない。自らの行動によって自分が生きている社会に影響を与える望みをなくした人間」と語っている。ここに、人格の不在が指摘されているのを見ることができるだろう。たとえば、哲学者のヤスパースは今世紀の初め、こうした時代の兆候を技術的世界の即物主義と特徴づけている。即物主義によれば存在とは即物的に存在することであり、価値や意味は重要でない。感傷をまじえず、だれにとっても解りやすい客観的な知識が大切にされる。事実が簡潔で単純に、画一的に報道されなくてはならない。人格とか感情は即物性とあい容れない。「人格が感じられるような場合には即物性はぶち破られることになるであろう。(中略)機能に解体されて現存在はその歴史的特殊性を剥奪される。」機構の中で他人の意志にしばられ、機能に解体された個人は「あてがわれたものだけをやりとげるのであり、なんらかの決断に迫られたときには、彼の機能の活動範囲内で偶然的におこない、事物を根本にまでさかのぼって究めることはない。」

もちろん我々のいる現代が丸山氏の言うように高貴さの感情を経験する機会を与えず、ヤスパースの論ずるように、人格に出会う機会も与えないと一応言うことはできるだろう。しかし、人格に出会うということは、そのような時代の制約の問題に尽きることなのだろうか。すでに、古代ギリシアの哲人ディオゲネスは、真昼間から提燈ちようちんをつけて町中を歩き回ったと言われている。本当の人間を探していると言いながら。ここでも、本当の人間の不在が、人格の不在が問題とされていたのではないのか。

それゆえ、現代の状況を考えるのであれば、ディオゲネスの人間の探求とどこが違っているかをはっきりとさせる必要がある。ここで思い出されるのは、この逸話をパラフレーズして、ニイチェが真昼間から提燈を掲げて神を探している狂人について語っている箇所である。「君達はあの狂気じみた人のことを聞いたことがないか、真昼間、提燈をつけて市場へ走り出、『俺は神を探している！俺は神を探しているのだ！』と、絶え間もなく叫んでいた男の話だ。ちょうどそこには、神を信じない者たちが大勢集まっていたから、彼はすさまじい哄笑をひきおこした。」あの「神は死んだ」という言葉が出てくる有名な情景である。本当の人間、賢者の姿に照らして人々の中で人間を探すことと、神の不在にあって神を探すことの差異に注目したい。

## II

ディオゲネスとニイチェとの差異は、思想的には古代のギリシアと近代ヨーロッパの違いと言って大きく違うことはない。いまその相違を詳しく論じているゆとりはないが、人間を超えつつ人間にとっての規範となり、いわば原型ともなるもの前で人間とは何であるか、そうした人間はどこに見出されるのかということが、古代ギリシアに固有の問題である。ディオゲネスは賢者は神々の友であると語っている。他方、神の死という考えが言い表わしているように、それに基づいて人間とは何であるかを問い得るような規範となるものの欠如、不在が近世のヨーロッパ思想を根底から規定しているものである。

紀元前 5 世紀ギリシアの悲劇作家ソフォクレスの『アンティゴネ』の中で合唱隊によって歌われている有名な一節はつぎのように述べている。

「不思議なものは数あるうちに、  
人間以上の不思議はない、  
波しら白く海原をさえ、  
吹き荒れる南風はえをしのいで渡ってゆくもの、  
四辺あたりにとどろく高いうねりも乗り越えて。

神々のうち わけても<sup>かしこ</sup>長い、  
 朽ちせず<sup>たゆ</sup>撓み<sup>を</sup>知らぬ大地まで 攻め悩まして、  
 来る年ごとに、<sup>す</sup>鋤き返しては、  
 馬のやからで 耕しつける。

(中略) 何事がさし迫ろうと、必ず<sup>てだて</sup>術策<sup>をも</sup>って迎える。  
 ただひとつ、求め得ないのは、死を<sup>のが</sup>遁れる道、  
 難病を癒す手段は工夫し出したが。

その方策の巧みさは、まったく思いも寄らないほど、  
 時には悪へ、時には善へと人を導く。  
 国の掟<sup>たゆ</sup>をあがめ尊び、神々に誓った正義<sup>まき</sup>を尊<sup>ま</sup>ってゆくのは、栄える国民。  
 また向こう見ずにも、よからぬ企みに<sup>くみ</sup>与<sup>く</sup>るときは、国を滅ぼす。  
 かようなことを働く者がけして私の仲間<sup>に</sup>ないよう、  
 その考えにも<sup>ひ</sup>牽<sup>か</sup>かされないよう。」(呉 茂一訳)

他方、17 世紀フランスの思想家パスカルの『パンセ』の中につぎのような言葉がみられる。

「では、人間とはいったい何という怪物だろう。何という新奇なもの、何という妖怪、何という混沌、何という矛盾の主体、何という驚異であろう。あらゆるものの審判者であり、愚かなみみず。真理の保管者であり、不確実と誤謬との掃きだめ。宇宙の栄光であり屑。(中略) そうだとしたら、尊大な人間よ、君は君自身にとって何という逆説であるかを知れ。へりくだれ、無力な理性よ。だまれ、愚かな本性よ。人間は人間を無限に超えるものであるということを知れ。そして、君の知らない君の真の状態を、君の主から学べ。神に聞け。」「一つは、人間は創造の状態、あるいはまた恩恵の状態においては、自然全体の上に引き上げられ、神に似たようなものにされ、その神性にあずかるものとされるということであり、いま一つは、腐敗と罪との状態では、人間はさきの状態から墜ちて、獣に似たものとされるということである。これら二つの命題は、等しく堅固で確実である。」

いずれの文章も人間を不思議で捉えどころのないものとして見ており、謎に直面しての緊迫した言葉の響きは同じであるが、そこにこめられている世界観、人間観はまったく違っている。前者は、「不思議なものは数あるうちに」であり、多くの不思議の中でとりわ

けそうであるものとして人間があげられている。それは、自然現象のただ中に見出される人間の営みであり、文化、国家の政治的秩序、技術の力（航海、耕作）などで神々にも拮抗するものでありながら、死の否定力によって限界に突き当たる存在である。人間の謎はここでは永遠の秩序の内では考えられている。その限り、それは古代の存在論のひとつの典型的な表現であって、出来事あるいは事物はなんらかの祖型に基づいて初めて実在性を持つのである。ここで祖型とは、物事を知り理解する際の原理ともなるものである。

これに対して、後者では人間の矛盾、混沌は他の何物とも比較できるものではない。人間は自然全体の内に位置を保つのでなく、「自然全体の上に引き上げられ」ながら「獣に似たもの」なのである。「あらゆるものの審判者」であって「愚かなみみず」と言われる。人間をその中に位置づける秩序、調和の可能性が見定められないのである。祖型となるものが、決定的に喪失されているという感覚をそこに感じることができる。別の断片では「真の本性が失われたので、すべてのものが彼の本性になる。ちょうど、真の善が失われたのですべてのものが彼の真の善となるように。」とも書いている。この「真の善」の喪失は神からの離反、墮罪のことである。理性の働きによっては本当の善を回復することができない。ただ神の恩寵によるしかないことをパスカルははっきり理解している。ここに古代ギリシアにはなかった知識と信仰の分裂がはっきりと認められる。「理性の最後の歩みは理性を超えるものが無数にあることを認めることにある。」「無力な理性」なのである。

さらに、これも有名な断片の一つであるが、「この無限の空間の永遠の沈黙は私を恐怖させる」はパスカル自身ではなく、当時の無神論者の感覚を表現したものであると言われている。この宇宙、自然はそれ自身価値や善について何事も語らない無限の空間なのである。近世ヨーロッパの科学的思考を身につけていたパスカルもまた無限の宇宙の恐怖を理解していたであろう。だから、こうも言われる。「無限の中において、人間とはいったい何なのであろう。」究極的に与えられる秩序、全体の調和を見出すことができないのである。パスカルの鋭敏な思考は、神の存在も本質も、理性によって知ることができないことを明白に理解している。ニーチェの神の死はそうした本性の喪失のラディカルな帰結であると言える。近代科学の自然観を受け入れる者は本当のところはこの喪失感と無縁ではないはずである。

ディオゲネスの問題との違いを強調するのは、時代背景や世界観に違いがあるというような常識的な指摘をすることではない。近代の技術を駆使してひたすらそのことに情熱を傾けてなされたことで、人間であることを恥じずにはおられない事件、人間の本性を決定的に疑わせる事件をこの世紀は目撃してきた。たとえば戦争における民間人の大量虐殺がそうである。そうした限界状況では、常識的に言って善いはずの人が、必ずしも善いわけではなく、思慮深い人の判断が常に正しいとは言えない。強制収容所の経験を思想的、

心理学的に解明したフランクルの『夜と霧』では、「人間の善意は全体からみれば罪の重いグループにも見出され」、「看視兵として囚人に対して人間的であろうとして何らかの人格的・道徳的な行為もあったのであり、他方では、彼自身の苦しみの仲間に不正を働く囚人の忌まわしい悪意もあったのである」と述べられている。

我々はここで人間を尋ねようと思う。それも、人格というような一般的な概念の意味を調べるのではなく、むしろ、今日まれであると言われた畏敬や高貴さ、あるいは尊敬といった感情に即して考えてみようと思う。ちょっと考えると、これは見込みのない試みのように思われるだろう。なぜなら、かんじんの畏敬という感情は、今日、特に日本では経験されることがきわめて少ないと言われるからである。それにもかかわらずそうした試みを為す理由は、たんなる概念の説明では、意味の一般的な水準を超えることができないからである。我々を取り囲み、我々自身その歯車として日々巻き込まれている、効率と採算とのみが決定的に重視される現代の社会機構は、そうした立論の一般性によってびくともしないだろう。ここでは概念の一般性でなく、むしろ感情の個別性、具体性の方が重要である。いや、まさに均質で数量的な意味に限定された合理性の理解、そうした合理性が支配的な価値となっている社会機構こそ、人格の経験を、深い感情の感受を不可能としているものであろう。では、理性でなく感情を、特別でまれな体験を求めればよいのだろうか。そうではない。官能だけではいけないのである。すでに、フルトヴェングラーも述べていたように、この分裂が問題なのである。一挙に全体を取り戻すことは不可能に近い。フルトヴェングラーは「現代の人間として、作品と直接に対決する」ことが大事だと言う。ヤスパースであれば、「事物を根本にまでさかのぼって究める」べきだと言うであろう。

### III

さて人格を尊敬の感情と結びつけて、道徳の原理をラディカルに探求した思想家として18世紀のドイツの哲学者カント(Immanuel Kant 1724 - 1804)の名をあげることができる。たしかにカントは、その顔のスケッチを見たことのある人には解るのだが、いかにも堅苦しい表情をしている。一般に、人間の情味に対し手厳しく、ただ道徳を規則、法則の形式だけで考えた人と見なされている。しかし、秩序、法則はただ理性のみから由来するとして、感性、感情の影響を極力排除する思想家ではあるが、緻密な形式の探求が、同時に深い感動を伴うことをカントは見逃していない。そのような、精神性に伴う感情として尊敬の感情は理解されるべきであろう。

おおよそカントについてよく知られている逸話は、散歩の時間が規則正しく、ケーニ

ヒスペルクの市民はカントの散歩を時計がわりとしたということであろう。教会の鐘の音を聞いたカントの知人が、時を告げる鐘が正確でない、まだカントさんが通りを通っていないからと言ったという。あるいは、それ以上によく知られているのは、カントがただ一度だけこの散歩の時間を守らなかったことかもしれない。ルソー( Jean-Jacques Rousseau 1712 - 1778 ) の『エミール』( 1762 ) の読書に熱中したためであった。こうした逸話をあまり厳密に考えてはいけない。それでもこの話はカントの人柄をよく伝えているように思われる。さて、カントとルソーの関係を考えるとき、知識のみが人間の善れを形づくと信じ、無知な賤民を軽蔑していた自分を反省して「ルソーが私を正道に導いてくれた。目のくらんだおごりは消え失せ、私は人間を尊敬することを学んだのである」とカントが率直な述懐を書き留めたことが知られている。この発言の中に人間は事物、物件とは違い、尊敬の対象として絶対的な価値を有するという、カントの批判哲学の基本的考え方が明瞭に見出されると言ってもよい。

1785 年に出版された道德哲学の基本的な著作『道德形而上学の基礎づけ』第一章は、常識の立場において道德の真の原理を見出すことから始まる。道德は学者、知識人のみならず、すべての人が関わる問題だからである。そこで強調されているのはいかなる制限もなしに善いと言われるものが是非とも求められなくてはならないということである。「この世界の中のどこであれ、さらにはまたその外においてであれ、制限なしに善いと思なされ得るようなものは何ひとつ考えることはできない。ただ善い意志を除いては。」この印象深い文章で始まる冒頭の数節の中に、この後展開される議論の核心的な部分が示されている。

カントがこの書を書く 20 年以上前に、イギリスの道德思想、一般に道德感覺説と言われる立場の思想家、特にハッチソン( Francis Hutcheson 1694 - 1747 ) に興味を示したことがある。その立場では、人間には道德的な善さを感じずある特殊な感覺が備わっていて、それが立派な行為について利害打算を超えた判断基準を与えると考える。ハッチソンによれば、ある種の行為ないし所持物については、その主体や持ち主に対して抑えようのない愛や好感を抱かせるものが経験上確かにある。そうしたものが道德的に善いものと言われる。たとえば、勇敢であること、正直であることなどである。他方、善いものであっても、それを所有しているからといってその相手に愛を感じないようなもの、たとえば邸宅とか土地などは自然的に善いものと言われる。

なるほどこうした善さの区別は分かりやすいものである。しかし、それが成立するのは通常の経験のレベルにおいてであって、人間の本性がそのままに肯定し得ないような局面、本性の喪失という事態が考えられる場面でもそれが通用するとは言えない。事実カントは、「善い意志に基づく原則が確立していないと、善い特性といえども極端な悪になりかねない」と言い、悪人の冷静さは、この冷静さという優れた特性を持たない場合より、彼

をはるかに危険で悪い者にすると指摘している。人間の本性が転倒していなければ、そして規範とも祖型ともなる原理が永遠の規範として経験の根底に与えられていれば、「制限なしに」という極端な問題のたて方は必要でないのである。

カントが情味に欠ける人のように思われるのは、その道德観がきわめて厳格で律法主義的に見られるからである。テキストの第一章で道德的に善い行為とは、義務に合致しているだけではなくて、義務に基づいた行為でなくてはならないと言われている。そこには、道德的に善い行為は仁愛に発するものであるとする道德感覚説の立場に対する批判がこめられていると見ることができる。なぜそれではそうした道德感覚の思想的な立場ではいけないのか。実はカントの考え方には、人間は無条件に善いと言える行為をすすんではいけない、もしそう見えたとしてもそこには常に隠された動機があり、根本では感覚的な享樂を、あるいは自分自身の幸福を、自己愛を目指している、という理解が見られるのである。そうすると、カントがルソーを読んで人間を尊敬することを学んだということはどう理解すればよいのであろうか。

さて、これからその問題を考えなくてはならないが、その前に誤解を除いておこう。カントが義務と言うとき、それは我々が通常使う意味とは異なっている。制限なしに善いと言えるものが善い意志であった。義務とはこの善い意志以外の何ものでもない。それが義務と言われるのは、人間が理性だけの存在ではなく、同時に感性、つまり感覚的に外部から刺激を受け取る存在であり、常に必ず善い意志に従うとは限らないからである。そこになんらかの強制力がなくてはならない。それが義務と言い表わされる理由であり、後には命令の一定の型、「命法」として把握される。カントはこの命法に基づいて道德を基礎から考え直そうとしたのである。

#### IV

人間の行なう行為で、それ自身が目的となるようなものは、すすんでは為されない。義務に基づいて、いやであっても義務だから為されねばならない。ここに人間性に対する蔑視があるのではないか。それが問題だった。これに対して、今述べたことから、つぎのように言える。人間は、制限なしに善いと思なされるものをすすんで行ない得るはずがない。そうしたものは経験の中に成立するものでない。経験の根拠、したがって原型的なものであるのだから。そうすると、これは蔑視なのではなくて、問題の難しさを言い表わしているのにほかならない。人間の在り方に関わりなく自体的に成り立っている祖型、原型が失われているとしたら、そうした原型的なものが成り立つためには人間がそれに自覚的



主体的に関係せざるをえないであろう。しかもそうした経験に先立っており、その根拠になるもの、カントの用語で言うとアプリアリ(先天的)な原理は、人間が勝手に創ったり、規定したりできないものなのである。

ところで、カントがルソーから学んだというのは、人間をそのままに肯定せよということではない。むしろ何が人間の尊厳をなすかの理解が問題になる。「書物のなかでは遠大な義務を追い求めながら、身のまわりの人々に対する義務をあなどるような世界市民を警戒するがよい」とルソーは述べている。カントにとって人間の尊厳をなすのは、もはや実践を離れた理論的学識ではない。それは道徳的行為の主体にある。冒頭の「制限なしに善いもの」への問いは、人間におけるあらゆる価値的なものがそこから、それに基づいて判断されるそうした原理を求める必要を明瞭に言い表わしている。そこには、経験的に知られているさまざまな徳目、価値、規範などを、そのまま秩序づけるような祖型が見出せないという事態の認識がある。ちょうど無限の宇宙の中に放り出されたように、さまざまな倫理学説のただ中に人間は巻き込まれている。そうした中で、人間を本当に人間たらしめているのは、制限なしに善いと言えるものを知るだけでなく、それに実践的に行為の主体として関わり得るということである。だから、カントは人格を道徳的な行為の主体と考える。もう一度言うと、この自然界の成り立ちや秩序について輝かしい知識を有していようがいまいが、そうしたことに関わりなく、すべての人が道徳法則に基づいて行為する点に、人間の尊厳が、人格の価値があるのである。

さて、我々がある人を尊敬すると言う場合、それは通常その人の勇気や力、社会的に高い地位、あるいは人柄のよさのような優れた特質に向けられる。カントによれば、それらは愛や恐れあるいは驚嘆の対象にはなっても、決して内面的な尊敬の対象にはならない。その点では力強い獣、大海や高峻な山岳また星をちりばめた天空などに対して同様な感情を抱くのと決定的に違うものではない。むしろ外見的には特に見栄えがしない平凡な市民であっても、その人が立派な道徳的行為を為していれば、尊敬の対象になる。だから『道徳形而上学の基礎づけ』には、はっきりと「人格は道徳法則の実例を我々に与えてくれる」とある。

しかし、これではまだ本当の答えに達していない。第一に、カントによれば本当の道徳的な行為の実例を経験の中であげることはできないのである。それはカントの思想に限られるものでもない。我々のわずかな経験だけからでも、立派な行ないだ、親切な人だと感じ入ったことの背景に周到な打算が隠されていたり、実際は相手の社会的な地位や権力に目をくらまされていたのだと後になって気づいたという苦い経験が思い浮かべられるであろう。道徳的行為の例をあげられない以上、人格を具体的に理解することはできないことになる。第二に、まんいち、道徳的に非の打ちようのない行為があり、それを道徳の完

全な実例としてあげることができたでしょう。その場合でも、この立派な人だけで人格の意味が充たされるわけではない。カントはルソーによって人間を尊敬することを学んだと言っていたのである。今の議論では知識を有する人間から、道徳的に優れた人物に尊敬の対象が変化しただけであって、人間そのものを尊敬することにはならない。

ところで、さきに引用した人格の規定において、カントは奇妙なことを述べている。「人格に対する尊敬は、本来は法則（例えば誠実等の）に対する尊敬にほかならない」というのである。ここから、カントが実例ということを経験的なものとして主張していないことが明瞭に解る。道徳法則の実例が人格の意味のすべてなのではない。さきに言及されたが、義務という概念はさらに厳密に「定言命法」と規定される。それは理性が出ず無条件の（定言的）命法であって、別の何かを得るための手段として命じられる、条件づきの（仮言的）命法ではない。カントはそうした定言命法を四つほどの形式で表現している。その中のひとつに、「君の人格と他のすべての個々人の人格に存する人間性を、決してたんに手段としてだけでなく、常に同時に目的としても用いるように行為せよ」という命法がある。この命法においては、人格と出会うことはただ受け身的にそういう相手の出現を待つのではなく、むしろ自分であれ他者であれ人間をどのように理解し、どのように人間に対するかという主体の積極的な姿勢が問題にされている。

そうすると、カントが尊敬の感情は本来道徳法則に対するものだとした、奇妙に思えた規定の深い意味が理解できる。立派な人に出会って受動的に尊敬の感情を抱くだけでなく、すべての人に目的自体である人格性を認め、それにふさわしく関われという無条件的な命法に対して、そして人間の有する可能性に対して畏敬の念、尊敬の感情を抱くというべきなのである。相手に価値があるから尊敬するに止まらず、自分をも含め人間に課せられた使命の崇高さゆえに尊敬の感情を抱くのである。カントの別の表現を使えば、それは受動的な感情でなく実践的な感情であり、命令される感情である。

## V

以上の考察から少なくともつぎのひとつのことが改めて気づかれるのではないだろうか。畏敬の感情、高貴さの経験、人格との出会いが、今日そして特に日本においてめったに見出されないとして、その根拠は立派な人が少ないという経験上の事実、外的な条件にだけあるのではないということである。むしろひたすら数量的な比較と価格のみに心を奪われている我々一人一人の、自分を含めた人間の見方の中により深い問題の根があり得ることを、カントの思想は警告しているのではないだろうか。

すでに言及したフランクルの本に、以上のカントの基本的な考えを見出すことができる。強制収容所において、その仮借ない現実によって、人間の尊厳とか人格性とか道徳法則などがいかに容易に否定されるか、いかに一人一人が暴力の前に良心を売り渡し、屈してしまうかをつぶさに観察したうえで、彼は生きる意味についての根本的な見方の変更が必要だと述べる。「ここで必要なのは生命の意味についての問いの観点変更なのである。すなわち人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。そのことをわれわれは学ばねばならず、また絶望している人間に教えなければならないのである。」

近代の科学的合理的組織的な力が最悪の表現をなした場所を経験した人によって、この言葉が語られているのは意義深い。周囲に偉大な人格が存在しないから尊敬の感情を忘れてしまっただけではない。あの映画監督が言っているように、自分自身を信じていることができなくなっているのだ。観点の変更が必要なのである。それによって、何か特別な経験を求めるのではなく、自分を含めいつも身近に出会っている人に、その人自身気づいていないかもしれないその人以上のものを見る、人生の方から期待されているものを見出すことが求められている。古来日本人は細やかなものに対して、豊かな感受性を持ち合わせていると考えられてきた。トランジスターや超小型記憶素子などの技術にその能力を発揮するだけでなく、目立たない平凡な事実に対して注意深くなくてはならない。先人たちはそうしたもののの中に詩歌の素材を見つけたものである。人格に対する感受性にしても事情は変わらないのである。

しかし、こうしたことをあまり安易に考えてもいけないだろう。決定的に原型、祖型が失われたということ自体は少しも変わっていないからである。カントの思想が、経験の事実をでなく、アプリアリな原理を問題にしていることの意味がそこにある。人格は絶対的な価値を持つと言われた。それは現実の経験において、つまり相対的なものを超えることのない所では、人格は十全に与えられないということである。その点、この人格の規定は対象の規定ではない。それによって人格が人格となる原理ないしは祖型的なるものの規定なのである。それこそ、根本にまでさかのぼるということである。だから、自分自身あるいは自分の隣の席にいる人を人格と見、目的自体として扱おうと決意さえしたら、その暖間から人格的關係が成り立ち、人格を知ることができるようになるというほど安易なものではない。厳密な意味で人格であることが義務であることの、それが無条件な命令の形で常に命じられるということの、深い意味がそこにある。それは一挙に達成できるものではなく、無限の彼方を目指して漸近線のように近づいていく動きと努力においてはじめて理解できる。そして、そうした日常的なものはるかに超えるものに向けられた持続的な努力は深い感動なしにあり得ない。強制収容所から生きて帰った後でフランクルがつぎ

のように述べているのを読むとき、我々も感動を禁じることができない。「何人も不正をする権利はないということ、たとえ不正に苦しんだ者でも不正をする権利はないということ、かかる平凡な真理をその人間に再発見させるには長い時間がかかったのである。そしてまたわれわれはこの人間をこの真理へ立ち帰らせるように努めねばならないのである。」

---

次の問題（1 - 28）には、それぞれ a , b , c , d , e の答えが与えてあります。各問題につき、a , b , c , d , e のなかから、最も適当と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a , b , c , d , e のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

---

I. 以下の問（1 - 12）に答えなさい（問 10 から 12 は一連の問いである）。

1. ディオゲネスとニイチェの間の差異は（ ）の差異に対応する。

- a. カントとフランクフル
- b. ソフォクレスとハッチソン
- c. ルソーとハッチソン
- d. パスカルとカント
- e. ソフォクレスとパスカル

2. 人間の逆説に当てはまらないものは（ ）である。

- a. あらゆるものの審判者で愚かなみみずであること
- b. 人間が人間を超えるものであること
- c. 理性の限界を知ることが理性の究極的働きであること
- d. 本性の喪失によってあらゆるものが本性となること
- e. 芸術家が神の恩寵を享ける容器でなくなったこと

3. カントが道徳感覚説を批判しているのは彼が（ ）からである。

- a. ルソーによって人間を尊敬することを学んだ
- b. 理性を無力だと考えた
- c. 制限なしに善いと言えるものは人間にとって不可能と考えた
- d. そこでは実践的な感情が考えられていないと判断した
- e. そこでは自然的な善さが十分評価されていないと判断した

4. 制限なしに善いと言われるものを求めざるを得ないとされる理由として当てはまらないものは( )である。
- a. 神が見出されないこと
  - b. 道徳感覚が信頼できないこと
  - c. 人間は不思議なものだということ
  - d. 人間の本性が転倒していること
  - e. 善さそのものの原理が与えられていないということ
5. カントの思想においてアプリアリの意味に当てはまらないものは( )である。
- a. 原型的なもの
  - b. 経験を超えるもの
  - c. 外部から刺激を受けること
  - d. 規則や法則の形式
  - e. 人間が創り出すことのできないもの
6. 人格の規定に当てはまらないのは以下のうち( )である。
- a. 絶対的価値をもつこと
  - b. 理性が無力であること
  - c. 目的自体であること
  - d. 道徳法則の実例であること
  - e. 実践的行為の主体であること
7. 「神は存在するかあるいは神は存在しないと言ってみよう。このどちらに我々は向かえばよいのか。けれども理性はいずれにも決定できない。我々を隔てている無限の混沌がある。」これは神の存在について賭をしなくてはならないと論ずる( )の言葉である。
- a. パスカル
  - b. カント
  - c. ニイチェ
  - d. ヤスパーズ
  - e. フランクフル

8. この論文に副題をつけるとすれば、それに最もふさわしいのは（ ）である。
- a. カントにおける義務の概念
  - b. カントにおける理性の限界
  - c. カントにおける道徳の原理
  - d. カント道徳哲学の思想史的背景
  - e. カント道徳哲学の現代的意義
9. 本論の内容と合致するものは（ ）ということである。
- a. フルトヴェングラーや丸山真男の現代に対する考え方は悲観的すぎる
  - b. 人格の意味は完全な道徳的行為の実例によっても尽くされることはない
  - c. ニイチェはパスカルと同じく神の不在の中で神を求めた
  - d. 現代の危機を克服するためには、古代の思想家や詩人を手本として祖型に立ち返る必要がある
  - e. フランクフルは現代の技術文明がもたらした思想状況に絶望している

ヨーロッパの思想の歴史をいくつかの段階に分けて論じた文を以下に引用するが、それに関して 10 から 12 までの問いに答えなさい。「1. 賢者、謙虚なるもの、有徳なるものには到達できる真の世界、彼はその中に生きている、彼がそれである。2. 賢者、謙虚なるもの、有徳なるものにとって、「悔い改める罪人にとって」、今は到達できないが、約束されている真の世界。3. 到達できず、証明できず、約束もできないが、考えられただけで既に一つの慰めであり、義務であり、命令である真の世界。4. 真の世界なんてもう何の役にもたためない理念だ、もはや何ら拘束することのない理念だ、無用、余計なものになってしまった理念、従って一つの論破された理念であるからには我らはそれを片付けてしまおう。」

10. この文の作者は 4 の立場に立つ。この作者は（ ）である。
- a. パスカル
  - b. ルソー
  - c. カント
  - d. ニイチェ
  - e. ヤスパーズ

11. ここで、1 の段階で意味されているのは ( ) の世界をさす。

- a. クレタ・ミケーナイ文明
- b. 古代ギリシア
- c. 古代ローマ
- d. 原始キリスト教
- e. ゲルマン民族

12. また 2、3 の段階はそれぞれ ( ) を意味する。

- a. ストア哲学とパスカル
- b. ストア哲学とカント
- c. ディオゲネスとニイチェ
- d. ディオゲネスとパスカル
- e. 中世キリスト教とカント

II. 以下の問題 (1-13) には、相互に関連する二つの文章 (1) および (2) からなりたっています。[(1) および (2) に先行してその説明文ないし導入文が置かれている場合もあります。] これらについて最も適当と思うものを、次の a, b, c, d, e の中から一つだけ選びなさい。

- a. (1) (2) とともに正しい。
- b. (1) (2) とともに誤りを含む。
- c. (1) は正しいが、(2) は誤りを含む。
- d. (1) は間違っているが、(2) は正しい。
- e. (1) (2) とともに、この資料からは、正しいとも、誤りを含むとも判断できない。

13.

- (1) フルトヴェングラーは、芸術家が神の恩寵を享ける容器であった時代には、精神と官能の分裂はなかった、と考えていた。
- (2) フルトヴェングラーは、現代の人間が感動に対する畏敬の念を取り戻すためには、ひたすら神の恩寵を願い求める必要がある、と考えていた。

14. ディオゲネスの逸話をパラフレーズしつつ、ニイチェは神を探し求める狂人について語っている。

- (1) この話は、ディオゲネスの人間探求においても神の不在が問題であったことを示している。
- (2) この狂人の逸話は、神の不在の意味を自覚していない大衆へのアイロニーになっている。



15.

- (1) 『アンティゴネ』の合唱隊歌に登場する「神々のうちわけても畏い、朽ちせず 撓み  
知らぬ大地まで 攻め悩ま」せる人間には、無限の宇宙の沈黙に恐怖する無神論者と  
共通する感覚がある。
- (2) 『アンティゴネ』の合唱隊歌における「不思議」とパスカルの「パンセ」の一節におけ  
る「驚異」には、共通する言葉の響きが感じられる。

16. 「尊大な人間よ、君は君自身にとって何という逆説であるかを知れ。……人間は人間を  
無限に超えるものであるということを知れ」とパスカルは述べている。

- (1) ここで人間の逆説とは、人間は人間を無限に超えていること、つまり人間は同時に栄光  
であり悲惨であるという二義性を免れないことを意味する。
- (2) 祖型の欠如は人間がそれに基づいて自分自身を理解する原理の不在にほかならず、パス  
カルの言う人間の逆説は、そうした祖型の欠如に基づいている。

17. 本資料に「ニイチェの神の死はそうした本性の喪失のラディカルな帰結であると言え  
る」とあったが、これは

- (1) キリスト教思想家パスカルもまた神の不在、つまりニヒリズムと無関係ではなかったこ  
とを暗示している。
- (2) パスカルが、人間は根本的には神なしに生きねばならないと考えていたことを示す。

18.

- (1) 本資料において祖型とは、それなしでは一切の秩序と意味があり得なくなるが、しかし  
それ自体は知の原理とはならないものを意味する。
- (2) 知識と信仰が分裂している近世において、祖型とは信仰の対象ではなく、知識の対象に  
ほかならない。

19. 人間探求において根本にまでさかのぼって考えねばならないのは、

- (1) 日常的経験での善悪の判断は、限界状況においてそのまま通用しないことがあるからで  
ある。
- (2) そのことによってのみ官能と精神、感情と理性の統合の回復が可能となるからである。

20. 筆者の考えで、近世以降に祖型が決定的に失われたということは、

- (1) イデオロギーなど存在全体に価値を与える枠組みが人間の主体的決断、選択によって決  
まってくる、また究極的には人類全体の存亡を決定できる技術的装置を身につけてしま  
っている現代の状況にも適用し得る。
- (2) たんに西洋の現象だけでなく日本にも等しく当てはまる問題である。

21.

- (1) ケーニヒスベルクの市民がカントの散歩を時計がわりとしたという逸話は、道徳を規則、法則の形式だけで考えた律法主義者カントの面影をよく伝えている。
- (2) カントがただ一度だけ散歩の時間を守らなかったという逸話は、彼による道徳原理の緻密な形式の探求が、人格への尊敬の感情を無視してなされてはいなかったことを暗示している。

22.

- (1) ルソーは遠大な義務を書物に求めるだけの世界市民を批判している。このことがカントにとって大きな衝撃となったと考えられる。
- (2) カントはルソーから、常識の立場に立って人間をあるがままに肯定することを学んだ。

23.

- (1) 尊敬の感情は本来道徳法則に対するものであるという考えは、抽象的な法則に向かうという点で、個々の人間に向けられた具体性を持っていない。
- (2) 尊敬の感情は人格に対する細やかな感受性から生じ得る。それはすなわら、人生から期待されているものを自分自身や他者の中に見出していく主体的な姿勢に伴うものである。

24. カントにおいて尊敬の感情がすべての人間に向けられるべきとされるのは、

- (1) すべての人間が絶対的価値を有するからである。
- (2) たとえ相手に価値がなくても、彼の可能性を尊敬すべきであるからである。

25.

- (1) 「日常的なものはるかに超えるものに向けられた持続的な努力は深い感動なしにあり得ない」と言われていたが、ここで「日常的なものはるかに超えるもの」とは、カントの言う道徳法則を指し示すと言ってよい。
- (2) フランクルの言う「何人も不正をする権利はない」という「平凡な真理」は、カントの言う道徳法則に対応すると言ってよい。

26. 近代ヨーロッパに生まれた科学的自然観は、宇宙を価値や善については何も語らない空間と見る。

- (1) この自然観を受容する者は、同時に道徳的行為の主体としての人格を喪失せざるをえない。
- (2) 日本人の場合は、古来の細やかな感受性をトランジスターなどの優れた技術に適応させているところから、少なくともこの自然観が内包する問題性とは無縁であると言える。

27. カントの思想は現代の社会に対して少なからざる意味を持っていると言える。それは

- (1) 畏敬の感情、高貴さの経験がまれであることの理由が、我々の人間観にあることを知らしめるところにある。
- (2) 目立たない平凡な人間の中にもある人格の価値に対して感受性をよみがえらせることの重要性を示唆しているところにある。

28. フランクフルは、「人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである」と語り、観点の変更の必要を説いている。ここで観点の変更とは、

- (1) 自らの行動によって自分が生きている社会に影響を与える望みをもつことと換言できる。
- (2) 効卒と採算とのみが決定的に重視される現代の社会機構において、理性の立場ではなく感情の立場を重視することであると換言できる。